2024
11
No. 739

國學院大學学報

「飄風」
ふるさとにひとり來たりて
わが故家（フルヘ）たゞ在るさまを見て
かへるなり
『倭をぐな』
釈　迢空

国学院大学
令和6年11月20日㈬　定期号（毎月20日発行）　1部20円
［発行］国学院大学　［編集］総合企画部広報課　〒150-8440 東京都渋谷区東四丁目10-28　［電話］03（5466）0130　［FAX］03(5466)0528

祭　儀　■ **月次祭・新嘗祭**　12月2日（月）　午前10時　仮殿

『研究者に聞く』

理論と実践を併用する 経営コンサルタント兼 研究者がもつ目線

経済学部・手塚貞治教授

中小企業を考えることは、今の日本社会を考えることに等しいのかもしれない――ということが手塚貞治・経済学部教授の話を聞いていると、よくよく実感されてくる。例えば中小企業に関してよく議論される事業承継という問題は、創業者がその手腕において成長させた企業から自らの権威性を減じさせていくプロセスであり、そこには集権化されたシステムを分権的システムへと転換させていくことを巡る課題が存在している。

30年近い年月にわたって中堅中小企業をクライアントとした経営コンサルティングを行い、経営戦略やマネジメントなどに関係する書籍を手がけつつ、研究者として論文を書き継いでいく手塚教授の歩みは、単線的ではないが、だからこそ面白いのだということが伝わってくる。

なぜこのような研究に取り組むことになったのかを振り返りながら、実社会の中で人々をサポートし、そこからの発見や知見に学術的な検討を加え、また実社会へと還元していく……こうしたプロセスをたどるようになった経緯をじっくりと語ってもらった。

4・5面に関連記事

創立記念祭・関係物故者慰霊祭を執行

関係物故者慰霊祭で「慰霊の舞」を奉納する学生たち

学校法人国学院大学は、11月4日に母体である皇典講究所の創立から142年を迎えた。これに先立ち1日に創立記念祭および関係物故者慰霊祭を渋谷キャンパスで執行した。

創立記念祭（斎主＝大野靖仁・法人参事、神殿奉斎員）は仮殿で斎行され、佐柳正三理事長、針本正行学長らが参列し、今後の本法人と設置校のさらなる発展を祈念した。その後の直会では佐柳理事長より「法人全体で中期5ヵ年計画を遂行し、新しい時代に適応した国学院を作り上げていく」といった抱負が述べられた。

関係物故者慰霊祭（斎主＝星野光樹・神道文化学部准教授、神殿奉斎員）では、創立以来、物故せられた役教職員や学生生徒、とりわけこの1年間に亡くなられた法人各校の関係者の御霊を迎え、百周年記念館百周年記念講堂で斎行された。斎主による祭詞奏上の後、伶人の奉仕による「追慕歌」や学生による「慰霊の舞」などが奉納された。佐柳理事長、針本学長に続き、遺族や学生代表らが祭壇に玉串を捧げ拝礼し、物故者をしのぶとともに後進の行く先をお護りくださるよう祈願した。

みはるかすもの

本格的な秋の訪れとともに、駅伝ファンにとって待ち望んだ季節がやって来た。日ごとに下がる気温と裏腹に、本学は、大学三大駅伝初の2冠達成に沸いている。出雲駅伝で快走したエースの平林選手は、どこか人間離れしていて、足運びの速さや長いストライドは、サバンナを駆ける草食動物を想起させた。解説者は並走した駒沢大学が有利と予測していたが、闘志あふれるキャプテンの表情から国学院の勝利を予感した視聴者は多かったのではないか。続く全日本大学駅伝では、ライバル校が打倒国学院の執念を燃やす中、本学の選手たちは一丸となって見事に重圧をはねのけてみせた。

熱戦を制した選手と指導者に、心から敬意を表したい。レース後のインタビューでも、素直で爽やかな受け答えに好感が持てた。背景には想像を超える厳しい鍛錬と努力があったに違いない▼マラソンランナーとしても知られる小説家の村上春樹氏は、著書『走ることについて語るときに僕の語ること』（文藝春秋）の中で、市民ランナーとはいえ念入りな準備をしてレースに臨むことを明かしている。また、心身の状態や天候などによって、思い通りの走りができない長距離走の難しさも語っている▼どんな競技であれ選手や指導者が最も悔しいのは、せっかく準備をしてきたのに、本来の力を発揮できずに終わってしまうことだろう。箱根駅伝でも、選手たちが日ごろの努力の成果を余すところなく発揮し、悔いのないレースをしてくれることを願っている。

主な内容　**2面**／若木育成会キャンパス見学会 父母らが模擬授業などを体験　**3面**／第14回観月祭 学生が舞、演奏を披露
4・5面／理論と実践が交差する企業支援の最前線　**6面**／令和7年度 学費一覧

最終面から　K：DNA　**Ⅰ面**／陸上競技部 大学三大駅伝2冠の快挙 全日本大学駅伝初優勝　**Ⅱ面**／硬式野球部 ドラフト会議 坂口投手がDeNAから6位指名

若木育成会キャンパス見学会

父母らが模擬授業などを体験

高内寿夫・法学部教授による模擬授業［渋谷］

受付・キャンパスツアーの様子［たまプラーザ］

在学生の保証人（父母ら）により構成される国学院大学若木育成会のキャンパス見学会が10月26日に渋谷・たまプラーザ両キャンパスで開催され、合わせて約1900人がキャンパスに足を運んだ。

渋谷キャンパスでは、同会の郡司掛司会長が「模擬授業のほか、就職・留学ガイダンスなどもぜひご参加いただきたい。また、学食を召し上がっていただき親子共通の話題を増やしていただきたい」とあいさつ。各種ガイダンスや文・経済・法・神道文化学部の模擬授業はいずれも満席となり、父母らは熱心に耳を傾けていた。

たまプラーザキャンパスは約400人が来場。太田直之キャンパス長（人間開発学部長、教授）が「それぞれの学部の特徴に合わせたさまざまな施設や、課外活動が盛んに行われている様子を見ていただきたい」とあいさつ。模擬授業や学部ガイダンスが満席となったほか、職員によるキャンパスツアーでは特徴的な教室やスポーツ施設などの見学が行われた。

両キャンパスとも図書館見学が行われ、充実した蔵書に参加者から感嘆の声が上がる様子も見られた。参加者には学食にも使える金券が配付され、昼食時には各学食はにぎわいを見せていた。渋谷キャンパスでは院友会（卒業生組織）支部等による物産展も開催され、参加者はキャンパスでの時間を楽しんだ。

理事長・学長らが展墓

学校法人国学院大学では、創立記念日を迎えるにあたり、佐柳正三理事長、針本正行学長はじめ役員らが10月28日、豊島岡御墓所に皇典講究所初代総裁・有栖川宮幟仁親王と高松宮宣仁親王・同喜久子妃を参拝した。

続いて護国寺檀徒墓地において、皇典講究所初代所長・山田顯義伯爵と戦後の混乱期に本学をけん引した石川岩吉・元理事長兼学長の展墓を行った。

戦没先輩学徒慰霊祭を斎行

第54回戦没先輩学徒慰霊祭が10月14日に渋谷キャンパス正門横の「學徒慰霊之碑」、「建碑来歴碑」前で斎行された。

戦没先輩学徒慰霊祭は、昭和18(1943)年に本学独自の学徒出陣の壮行会が行われた10月14日に合わせて昭和46年に学生有志によって始まった。

当日は、戦没先輩学徒慰霊祭実行委員会の学生をはじめ、院友（卒業生）、教職員が参列し、学生による「浦安の舞」の奉奏などが行われ、慰霊碑に祀られている御霊を慰霊した。

永年勤続者表彰に24人

学校法人国学院大学では、創立記念日を迎えるにあたり、11月1日に渋谷キャンパスで勤続45・40・30・20年の節目を迎えた法人・各設置校の教職員を表彰した。当日は佐柳正三理事長から表彰状が手渡された。対象者は24人（敬称略）。

【勤続45年】國清英明(国学院大学久我山中学高校)

【勤続40年】北澤薫（大学）、金澤裕二、梶田信之(以上国学院高校)、笠井誠司、土屋謙太郎（以上国学院大学久我山高校）

【勤続30年】坂本正徳、人見剛、木村都、北林朋子、三上良子、岡澤智子（以上大学）、関口博和(国学院高校)、山村昭夫、藤田久美子、諸冨嘉代(以上国学院大学久我山高校)

【勤続20年】黒澤直道、樋口秀実、福岡英明、中曽根玲子、姫野学郎、佐藤友宏（以上大学）、月岡道晴（国学院大学北海道短期大学部)、梶善之（国学院大学久我山高校）

学生部主催「お月見祭」初開催

学生部主催の「お月見祭」が10月17日に渋谷キャンパスで実施された。在学生に日本の伝統文化の体験を通じて日本文化への思いをはせてほしいという目的で、学生イベント企画リーダーが主体となって運営する形で今年度より開催された。

第1部では、昼休みの時間に「餅つき体験」と「試食会」が行われ、参加した学生たちは順番に杵を持ち上げ、力強く餅をついていた。試食会では、約100人の来場者がさまざまに味付けされたつきたての餅を存分に味わった。

第2部の「月鑑賞」では、約60人の参加者たちが望遠鏡を通して「スーパームーン」を満喫していた。

学問ノ道　第64回

儒学歴史学派の掉尾（とうび） 川田剛

『國學院雑誌』一巻一号（明治27〈1894〉年11月）の「彙報」欄は、匿名ながら当時の国史学界動向を寸描して次のごとく記す。

「（維新後）国史は比較上其の筋に重視せられ修史館、修史局、史誌編纂掛など絶えず政府の保護を受けて進み来りけるが一昨（ママ）年四月に及びて同掛は突然中止せられたり…当時の世評によれば編纂委員諸氏の往々軽忽なる判断を下して処を撰ばず奇説を公にする事、又其の人々の本来漢学者にして国文に精しからぬが故に今日の史家たるに適せぬ事…又右従来の編纂掛委員諸氏の方針は成るべく博く事実を蒐輯して之れが考証批判を下し力めて科学的ならんことを欲する由なりしかど其の為る所在々些末の考証にのみ偏して大体の統一を疎かにし就中歴史上の美談を抹殺せし事などたび〳〵ありて夙に世の物議を醸したりし」と…。

そもそも明治政府は近代国家としての幕開けと同時に「正史」編纂を企図し、はやくから同時代史を編纂するべく太政官正院歴史課の設置（明治5年）や、文部省として歴史書の編纂を伊予国出身の儒学者であった川田剛（たけし）に委託する（明治6年）などに努めてきた。

川田剛（天保元〈1830〉～明治29〈1896〉年）

ただし、のちに文部省の事業は川田もろとも前者に移管、さらに修史局へと改組される（明治8年）。そして、この修史局成立にさいして入局したのが、昌平坂学問所で学んだ重野安繹（しげのやすつぐ）であった。重野は〝史〟が〝詩〟に通ずる臭気を嫌い、近世の考証学的手法を発展的に継承し史実の確定に力を注いだことで知られる。史実と認定し難い英雄譚を次々と一刀両断に否定することからついた渾名は「抹殺博士」であった。

一方の川田は考証学の正確さと歴史的美談や英雄佳話との共存を期待し、啓蒙のための史実利用にさいしては漢文よりも国文の方が優れるとの考えをもった。

必然、両者の意見には対立する場面が多くなり、取りわけ編纂にあたってその文体を漢文体国史とするか、国文体国史とするかでその相違は顕著であった。

その後、川田は修史館（明治10年改組）を明治15年に辞すに至り、宮内省出仕を本官とし、言論の場に皇典講究所・国学院をえることとなる。『皇典講究所講演』では漢文体国史の反省を史局に求め、国文体国史を再三提唱している。

このような経緯を念頭におくと、冒頭の国史学界評のあるじは、川田だったのでは？との想像が催される。事実、こうした論調の国史学界評は、ちょうど川田の死去のころまで『國學院雑誌』にみることができる。しかし、学問としての歴史学の性格や方向性は、いわゆる官学アカデミズムによりもはや定まりつつあった。草創期『國學院雑誌』にみえる国史学界への舌鋒は、かつての儒学者に顕著であった鑑戒（かんかい）史観の末期の嘆息といったところであろうか。

研究開発推進機構助教　比企貴之

第14回観月祭

学生が舞、演奏を披露

月夜の中で舞を奉納する学生たち

神道文化学部が主催する第14回観月祭が10月19日、渋谷キャンパスで開催された。観月祭は、平安時代から続く十五夜に満月を観賞する「中秋観月」の伝統に由来する行事。同学部の学生らが5号館ピロティに設けられた特設舞台で、先人より守り伝えられてきた管絃、祭祀舞、舞楽を古式ゆかしく披露し、本学の教職員や学生の家族、一般の観客らは学生たちの演奏と舞に大きな拍手を送った。

はじめに学生が舞台前に神饌を捧げ祭祀を行った。続く管絃では合奏の前に楽器の音律を整えるために奏する「太食調音取」や「合歓塩」「長慶子」が演奏され、竜笛や笙などの音色による息の合った演奏で、会場が荘厳な雰囲気に包まれた。

祭祀舞では、「朝日舞」と「浦安の舞」が披露され、色鮮やかな装束に身を包んだ学生たちが一糸乱れぬ舞を奉じた。続く舞楽では、舞楽会のはじめに舞台を清める御祓いの意味を持つ「振鉾」、唐楽の楽曲で慶事の際に舞う「賀殿急」、かつて朝鮮半島から伝来したとされる高麗楽の楽曲「仁和楽」の3曲を厳かに舞い、約2時間の観月祭が終了。約半年間にわたって合同稽古などに励んできた学生たちが観客を魅了していた。

息の合った演奏で、厳かな旋律を披露

学生総括を務めた学生は、「一致団結して一つの舞台を作れたと思う。一人一人の協力を得て、無事に終えることができた」と振り返り、笙を担当した学生からは、「下級生が熱心でみるみる上達していくことにとても驚いた。無事に終えられてホッとしている」と感慨深げに語っていた。

人間開発学部 学びの成果を地域に還元

たまプラーザキャンパスを拠点にする人間開発学部は、同学部の学生が企画する恒例の地域貢献イベントを開催し、地域住民との交流を深めた。

■共育フェスティバル

人間開発学部が主催する第15回共育フェスティバルが10月27日に開催された。この催しは、学生たちがこれまでの学業や活動の成果を生かし、地域の子どもたちや保護者と交流を深めながら「共に育つ」ことを目的に毎年開催されている。今年は過去最高の約1700人の親子連れが参加した。

今年のテーマは、全ての人の好きを広げたいとの学生たちの思いを込めた「楽しいがつながる、好きがひろがる」で、マーブリングなど楽しみながら学べる17の体験プログラムが提供された。参加した子どもたちは「また来年も参加したい」と話すなど、キャンパスは終日にぎやかな雰囲気に包まれた。

学生企画委員代表の山田あかりさん（初教3）は「最初から願っていた景色を見ることができた。ゼロからの準備は大変だったが、これまでには感じたことのない達成感がある」と充実した一日を振り返った。

共育フェスティバル「シャボン玉に入って知って楽しもう！」の一幕

■スポーツフェスティバル

人間開発学部地域ヘルスプロモーションセンターが主催する第9回地域交流スポーツフェスティバルが10月20日に開催された。今年は「～チャレンジ！スマイル！ハイタッチ！～」をテーマに掲げ、ゼミや同センター支援学生の会「ちーへる」が運営する企画ブース、蹴球部や準硬式野球部の体験企画に地域住民ら約400人が参加した。

スポーツフェスティバルは「スポーツ」と「健康」で大学と地域とをつなぎ、参加者に健康の保持増進に努めてもらうことを目標としている。地域交流を通じた貴重な学びの機会であり、参加者からは「健康を見つめ直す機会になった」との声が多く寄せられた。

広報活動を中心に担った小西栞音さん（初教1）は、「笑顔あふれる1日となった。誰もが気軽に参加できるように更なる工夫を重ね、スポーツを地域の皆さまにとってより身近な存在へと変えていきたい」とほほ笑ましく語ってくれた。

スポーツフェスティバル「野球体験」の様子

第11回

観光まちづくりカフェを開催

観光まちづくり学部地域マネジメント研究センターが主催する第11回観光まちづくりカフェが10月9日、たまプラーザキャンパスで開催され、学生や教職員、一般の方など約50人が参加した。

今回は「雪でメシを食う」をテーマに（株）野沢温泉初代社長の河野博明氏＝**写真**、（公財）全日本スキー連盟競技本部長の河野孝典氏、（一社）日本スノースポーツ&リゾーツ協議会副会長の神田昌幸氏の3人を招き開催。河野博明氏の講演では、野沢温泉の100年間の歴史を振り返りながら、湯治場から国際的スノーリゾートへ変遷することができた取り組みや背景について語った。

その後行われたトークセッションでは、スノースポーツとまちづくりの関連性について議論を繰り広げた。

スポーツビジネスを学ぶ講座

プロバスケの魅力発信を学ぶ

渋谷を本拠地としたプロバスケットボールリーグB.LEAGUEに所属する「サンロッカーズ渋谷」と協力した「スポーツビジネスを学ぶ講座」が渋谷キャンパスで10月11、25日、11月15日に計3回開催され、約30人の学生が参加した。

この講座は、株式会社サンロッカーズのマーケティングディレクターである吉村隆宏氏を招き、B.LEAGUEや「サンロッカーズ渋谷」の特徴や取り組み、マーケティング戦略などについて講義がなされた。

参加した学生は、メモを熱心に取りながらスポーツビジネスの現状や今後の展開について理解を深めていた。

文学部講演会

「手でふれてみる世界」開催

10月19日、渋谷キャンパスで外国語文化学科《多言語・多文化の交流と共生》プロジェクト・文学部講演会「手でふれてみる世界」が開催され、学生や教職員、一般の方など約40人が参加した。

本講演は、キュレーター・映画監督の岡野晃子氏を招き、岡野氏が監督を務めた映画「手でふれてみる世界」を上映。その後、岡野氏による映画の説明や解説が行われた。岡野氏は、本映画の舞台であるオメロ触覚美術館を全ての人に開かれたインクルーシブな美術館と説明。参加者たちは、美術鑑賞におけるアクセシビリティーについて理解を深めた。

講演会終了後には参加者たちから映画にまつわる多くの質問が寄せられ、予定時間を超える活発な質疑応答が行われた。

倉林正次名誉教授 逝去

国学院大学名誉教授の倉林正次氏が11月6日に逝去。99歳。葬儀は既に執り行われた。

倉林氏は大正14年生まれ。昭和25年国学院大学文学部卒業、29年同大学大学院日本文学専攻科修士課程修了、33年同博士課程修了。文学博士。34年国学院大学日本文化研究所研究員、36年文学部専任講師、39年助教授、44年教授。平成8年定年退職、同年名誉教授。専門は日本の儀礼文化全般、民俗学。在職中、大学院委員長、折口博士記念古代研究所所長等を歴任したほか、国学院大学北海道短期大学部第4代学長を務めた。

平沼正治・元文学部助教授 逝去

国学院大学元文学部助教授の平沼正治氏が10月29日に逝去。90歳。葬儀は既に執り行われた。

平沼氏は昭和9年生まれ。32年国学院大学政経学部卒業。国学院大学久我山高校教諭を経て、40年国学院大学文学部専任講師、52年助教授。平成15年自己都合退職。専門は体育学。

研究者に聞く

理論と実践が交差する 企業支援の最前線

理論と実践の両軸でクライアントを支える

経済学部・手塚貞治教授

対中小企業ならではのコンサルティングの醍醐味

「中小企業」と聞くと、どんなイメージを思い浮かべるでしょうか。町工場のようなイメージがパッと浮かぶ方も多いかもしれません。もちろんそうした町工場も中小企業ではあるのですが、そればかりではなく、中小企業基本法における定義に基づいて日本の企業を分類すると、実は99・7％の企業が中小企業なんですね。例えば、定義だけで言えば、ヨドバシカメラもアイリスオーヤマも中小企業です。さらに言えば、今や大企業と呼ばれる企業も、設立当初のある段階までは中小企業に分類されていたわけですね。そう考えると、日本社会にいかに中小企業が、あるいはそこから規模を大きくしていった企業がひしめいているのか、ということがお分かりいただけると思います。

私が大学で行っている授業でも、中小企業とは実はこういうものなんだよと話すと、就職活動に関して強い関心を抱いている学生たちの中で、中小企業という存在がだんだんとリアリティーを帯びてくるようです。あの会社も、かつて私自身がコンサルタントとして関係したことがあって……と具体的なエピソードも交えると、大企業だけが視界に入っていた学生の意識も、少し変わっていく。今も私たちの身の回りにはたくさんの中小企業が存在していて、そこで働いている人たちがいるということを、私の実体験にも基づきながら伝えられればと思っています。

ここで触れておきたいのは、中小企業ならではの魅力、という点です。大企業さんのコンサルティングにもさまざまなやりがいがあるとは思うのですが、一方でよほどの関係性を結ばない限り、いちコンサルタントの知見がその企業全体を大きく変えていく、というようなことはなかなかないでしょう。中小企業さん対象の場合でしたら、オーナー社長と膝をつき合わせて話し合いながら、経営計画をつくり、幹部の育成ですとか、事業承継といった数々の課題に一緒に向き合っていくことができる。そうした醍醐味を、実感として味わってきました。

また、起業したばかりのスタートアップだと、費用をいただいてのコンサルティングというのは難しいです。そのため、コンサルティング面で、そして何より現在の研究における関心事という面においても、密接に関わるようになるのは、やはり創業期の〝次〟にあたる段階にあるわけです。成長段階の〝踊り場〟に達した企業もあれば、先ほど触れた事業承継という課題に取り組む企業もあり、第三者の見解が必要になってくることがある。他にも例えば、上場を目指す時期にある企業の支援を行い、実際に上場までこぎ着けることができたとなれば、コンサルタントとしてはやはり大きな満足感がありますし、そうしたネクストステップへと踏み出そうとする中小企業のポテンシャルを研究の視点で考えることにもまた、さまざまな可能性があるように思います。

事業承継の壁を乗り越えるガバナンスモデルとは

研究者として最近面白いなと思っているのは、オーナー企業におけるガバナンスのありようです。例えば近年調査している、ある非上場のオーナー企業は、100年単位で続いている歴史を持つ会社なのですが、創業家と従業員との関係性がうまく機能していることが分かってきました。ファミリービジネスというものは、得てして経営と所有が創業家に一元的に独占されてしまい、その歪みが事業承継のときに障壁となる……というのが一般的なイメージだと思うのですが、実はうまくいっている企業というものは、なかなか目に見えない、しかし非常によく考えられた分散的な仕組みというものを備えている。創業者＝初代においては、まずはその会社をけん引していくために経営と所有は分かちがたく結び付いていくものの、その後2代目、3代目、4代目……と事業承継していく中で、その結び付きをうまくほどいていく。もちろん創業家は、いつの代になっても何かあったときの頼れる相談役やメンターとして、いわば精神的支柱として機能する。そうしたシステムは、とても興味深いと感じるのです。

ハイリスク・ハイリターンの選択肢へと果敢に挑んでいけるオーナーシップというものはきちんと持ちつつ、しかしその危うさに対するガバナンスというものがきちんと効いている。そこがファミリービジネスとしての中小企業、あるいはそこに端を発して成長していった企業の、面白いところだと考えています。

改めて自身の歩みを振り返ってみると、まずはコンサルタントとして、オーナー社長の相談役、いわばスパーリングの相手になっていくうちに、事業承継の課題に取り組むようになりました。そうしたプロセスと軌を一にするようにして、研究者として関心を抱くトピックもリニアに動いてきた、ということがあります。

てづか・さだはる
博士（学術・経済学関係）。専門は経営戦略論、事業計画論、中小企業経営論。主な著書に、『新版　経営戦略の基本』（2024年、日本実業出版社）、『新版　マネジメントの基本』（2023年、日本実業出版社）など。

〈企業とともに道なき道を歩むために〉未来を探る

経営コンサルタントとして働きながら大学院に通い、その後も仕事と並行しながら研究者の道を歩んできた私の経歴は、シンプルとは言い難いですし、分かりやすいものではないかもしれません。ただ、主に中堅中小企業を中心にコンサルティングを続け、その日々の中での気付きも踏まえながら学術的な議論に取り組んできた日々は、理論と実践という意味において、やはりどこか密接につながってきたように私自身感じています。

実は大学生の頃から研究者になりたい、自分の考えをまとめて発信してみたいという思いはありました。当時専攻していたのは社会学だったのですが、なかなか身辺の状況が許さず、民間企業に一般就職をしたのでした。当初は通信業界に就職して20代を過ごしていたのですが、しばらくすると、コンサルティングという仕事がなんだか面白そうだ、と気付くに至ります。1990年代半ばのことでした。コンサルティングという仕事のどこに引かれたのか……振り返ってみると、やはり理論と実践の両輪がある、ということだったように思います。企業を支援していくという実践的な領域であり、同時にその支援の際に重要となる経営戦略などについて情報発信して、世に問うていくことができる、ということですね。

結果としてコンサルタントとして向かい合っていったのが中小企業だったということに関しては、親の影響が大きかったのかもしれません。私の父親は、零細企業の創業経営者でした。とはいえ私が継ぐということはなく、父の代で畳む会社であるということは当時から分かっていたことではあったのですが、それでもいわゆるオーナー社長ですとか、ファミリービジネスといったものに対するなんとも言えないシンパシーのようなものは抱いていました。コンサルティングの仕事にあたったのが、大企業よりは大半は中小企業やベンチャー企業の支援であったというのは、生まれ育った環境から知らず知らずのうちに影響を受けながら、そうした企業や人々の役に立ちたいという思いがあったのでしょう。

そのようにして、理論と実践が分かち難く結び付いたコンサルティング業務に汗を流しはじめ、そのすぐ後には、かねて取り組みたかった研究の道にも飛び込むべく、大学院の門戸をたたいたのでした。今で言うところの、社会人大学院生ですね。以来、コンサルタントとして中小企業を支援しながら、経営に悩む方々に向けた一般書を書いていき、一方で研究者として論文を書く、という日々を長らく過ごしてきました。

あくまで個人的な信条ではありますが、知識というものはユーティリティーを持つ必要がある――言ってみれば役に立ってなんぼ、だと思っている人間なんです。クライアントから感謝の言葉をかけていただける瞬間というのは、その有用性を実感できる、ありがたい瞬間でもあります。別の方面から考えてみると、自分があれこれと取り組んできたことは、中小企業の経営者の皆さんが悩むようなことに対して、なるべく一貫したサポートができるよう、働きかけてきたのだということができるのかもしれません。

一つの企業が創設され、ある程度の規模へとスケールするまでは、とにかくガムシャラであるということは、経営ないし経営学を専門としない方であってもご理解いただけるだろうと思います。ベンチャー企業をイメージしていただけると分かりやすいでしょう。思い描いたビジョンへ向かって、とにかくその絵をかたちにしていくことに必死です。私がこれまで書いてきた『武器としての戦略フレームワーク』（2022年、日本実業出版社）などのいろいろな一般書は、特にこうした段階でお役立ていただけるはずです。今もイノベーションに関する書籍を執筆中なのですが、事業をどんどんと前にドライブさせていき、またスムーズにアイデアを事業へ落とし込んでいく、そのためのノウハウをシェアしようとしてきました。

他方で、コンサルティングの支援を必要とするクライアントの方々は、こうしたフェーズの先で悩んでいたり、その次をどうすべきか模索していたり、ということがほとんどです。例えば、創業者の方が、自分が手がけてきた会社をIPO（新規上場）へと進めようとしている、といったケースなどがあります。そのためには、トップの手腕で引っ張ってきた経営を、より組織的なものへとシフトさせて、経営計画を練っていく必要があります。

しかしそうしたとき、経営者、特にオーナー社長と呼ばれる方々は、往々にして孤独であることが多いのです。いろいろとお互いに議論を重ねながらプランを練っていくことができる、そんな相手が、周りになかなかいない。そうしたときにコンサルタントが、いわば対話のスパーリング相手になり、その中で解決の糸口を提示していくわけですね。研究者として論文に書いてきたのも、いわばこうした〝次〟のフェーズを模索する中小企業のありようについてでした。例えばかつては、ベンチャーを中心にした企業間の提携について論じましたし、今強く関心を抱いているのは、創業者から次の代への事業承継についてなんです。

企業は、組織体としてはゴーイングコンサーン（継続していくという前提）でありますが、経営者という人間には、残念ながら寿命があります。創業者のカリスマ性で成立させていた企業体制をどのように次世代に引き継いでいくことができるのか、これはあらゆる企業にとっての課題です。一筋縄ではいかない課題ですが、だからこそ私の一つのライフワークとして研究を続けていければと思っています。企業が走り出して、やがてその先を考えるようになる。そのそれぞれのフェーズで、コンサルタントとしても、研究者としても、役に立てればと思って活動してきています。これからも、中小企業の中で道なき道を模索する、いわばエスタブリッシュされたものではない進路を探ろうとしていらっしゃる方々と、未来を担う学生たちに向けて、オーナー企業の皆さんからいただいたものをお返しできるような、研究者としての発信を続けていければと思っています。

令和7年度 学費一覧

令和7年度学費は次の通りです。

学部

(単位：円)

区分	入学年度	入学金	授業料	施設設備費	維持運営費	合計
文学部	令和7年度	240,000	830,000	210,000	10,000	1,290,000
経済学部						
法学部						
神道文化学部						
人間開発学部		240,000	850,000	250,000	10,000	1,350,000
観光まちづくり学部		240,000	800,000	250,000	10,000	1,300,000
文学部	令和2～6年度	——	760,000	210,000	10,000	980,000
経済学部						
法学部						
神道文化学部						
人間開発学部	令和2～6年度		800,000	250,000	10,000	1,060,000
観光まちづくり学部	令和4～6年度					
文学部	令和元年度以前	——	700,000	201,000	10,000	911,000
経済学部						
法学部						
神道文化学部						
人間開発学部						

備　考：再入学者の入学金については半額とする。

別科

(単位：円)

入学年度	入学金	授業料	施設設備費	維持運営費	実習料(入学年度のみ)	合計
令和7年度	145,000	420,000	81,000	10,000	6,000	662,000
令和6年度以前	——	420,000	81,000	10,000	——	511,000

令和7年度学費について

令和7年度入学生（学部〈観光まちづくり学部除く〉・専攻科）から学費を**別表**の通り改定いたします。なお、在学生の学費改定は行いません。

改定額は、文学部・経済学部・法学部・神道文化学部・専攻科で年間授業料を70,000円増額、人間開発学部で年間授業料を50,000円増額いたします。今回の学費改定により、資源価格の高騰等による収支の圧迫を軽減させ、大学の永続性を確保するとともに、学部の特色を生かした教育・研究のさらなる発展・維持充実に努めてまいります。

（財務部経理課）

専攻科

(単位：円)

出身別	入学年度	入学金	授業料	施設設備費	維持運営費	合計
本学卒	令和7年度	120,000	830,000	105,000	10,000	1,065,000
他大学卒		240,000	830,000	210,000	10,000	1,290,000
本学卒	令和6年度以前	——	760,000	105,000	10,000	875,000
他大学卒		——	760,000	210,000	10,000	980,000

備　考：本学出身者の入学金および施設設備費は半額とする。

大学院

(単位：円)

区分	出身別	入学年度	入学金	授業料	施設設備費	維持運営費	合計
前期課程	本学卒	令和7年度	100,000	505,000	100,000	10,000	715,000
		令和6年度以前	——	505,000	100,000	10,000	615,000
	他大学卒	令和7年度	200,000	505,000	200,000	10,000	915,000
		令和6年度以前	——	505,000	200,000	10,000	715,000
後期課程	本学卒	全入学年度	——	505,000	——	10,000	515,000
	学部本卒前期他卒	令和7年度	100,000	505,000	100,000	10,000	715,000
		令和6年度以前	——	505,000	100,000	10,000	615,000
	他大学卒	令和7年度	200,000	505,000	200,000	10,000	915,000
		令和6年度以前	——	505,000	200,000	10,000	715,000

備　考：1.授業料、施設設備費、維持運営費は在学中毎年度納入するものとする。
2.本学出身者の入学金および施設設備費については次の通りとする。
イ.前期課程　半額
ロ.後期課程　本学前期課程修了者は徴収しない。本学学部出身者で、他大学前期課程修了者は半額。

インフォダイジェスト

…在学生　…保証人　…卒業生　…一般　…受験生

内内容　日日にち　時時間　場場所　対対象　定定員　料料金　申申し込み　問問い合わせ

大学からのお知らせ

卒業式、卒業証書・学位記並びに修了証書授与式について

日令和7年3月23日㈰

［卒業式］

場グランドプリンスホテル新高輪　宴会場「飛天」

対・場

▶経済学部・法学部・人間開発学部＝10時～

▶文学部・神道文化学部・専攻科・別科＝13時～

［卒業証書・学位記、修了証書などの授与］

対・時・場

▶経済学部・法学部＝13時～、渋谷キャンパス

▶人間開発学部＝13時30分～、たまプラーザキャンパス

▶文学部・神道文化学部・専攻科・別科＝16時～、渋谷キャンパス

※参列は**学生・家族等（2人まで）**となります。

問総務課（☎03・5466・0111）

令和7年度 一般選抜入学試験のご案内

内令和7年度の一般入学試験を**下表**の日程で実施します。入学試験制度のV方式とA日程同時出願や、複数学科を併願した場合、2回目以降の受験料を割引する応援割も用意。詳細は本学HP（**二次元コード**）でご確認ください。

※本学の一般入学試験は受験ポータルサイト「UCARO（ウカロ）」上でのインターネット出願となります。

問入学課（☎03・5466・0141）

令和7年度 一般選抜入学試験日程

入学試験制度		試験日	出願期間（消印有効）	合格発表
V方式（大学入学共通テスト利用入学試験）		1月18日㈯～19日㈰ 本学個別試験なし	1月4日㈯～17日㈮	2月14日㈮
A日程（全学部統一）	3教科型	2月2日㈰	1月4日㈯～22日㈬	
	最高得点科目重視型	2月3日㈪		
	学部学科特色型 英語外部試験利用型	2月4日㈫		
B日程（後期）		3月2日㈰	1月4㈯～2月21日㈮	3月12日㈬

※試験科目などの詳細については本学HPでご確認ください

博物館

料無料

時10～18時（最終入館17時30分）。祝日を除く月曜休館。休館日は博物館HP（二次元コード）でご確認ください。

※博物館関連イベントの問い合わせは☎03・5466・0359

特別展「文永の役750年 Part2 絵詞に探るモンゴル襲来―『蒙古襲来絵詞』の世界―」

今年はモンゴル帝国が鎌倉時代の日本への侵攻を図った文永の役からちょうど750年です。本展では熊本県・菊池神社と埼玉県・根岸家が所蔵する『蒙古襲来絵詞』模写本を全巻展示します。模写本には原本とは異なる内容を持つものが多く、その違いはそれぞれの模写本が作成された経緯や時期など、さまざまな要因があると考えられます。

本展では、両模写本の位置付けの検討を試みると同時に、作者である竹崎季長の思いやモンゴル襲来が日本に与えた影響にも迫ります。

日11月30日㈯～令和7年2月16日㈰

場博物館企画展示室

おやごころこのおもい 第24回

場（ポジション）を得て、子どもは光る

名誉教授 **新富 康央**

しんとみ・やすひさ
学校法人国学院大学特別参事。人間開発学部初代学部長、専門は教育社会学、人間発達学。新しい時代の子育て論には定評。

「強いから横綱なのではなく、横綱だから強いのです」。これが、ウルフと称された小さな大横綱千代の富士のNHK記者インタビューの「どうして横綱は強いのですか？」への返答でした。

記者は意味が呑み込めず、「えっ、強いから横綱なのでしょう」。それに対し千代の富士は同じ言葉を繰り返し、ただ満面の笑みでした。

「横綱だからこそ、横綱という持ち場＝ポジションを汚さぬよう（頑張って）強くなっているのだ」。そのテレビ画面を見たとき、大横綱のオーラを感じたものでした。

今年の出雲駅伝、全日本大学駅伝での平林清澄選手の快走は記憶に新しいところです。前田康弘・国学院大学陸上競技部監督に同じ質問をすれば、おそらく次のように回答するでしょう。

「速いからエースなのではなく、エースだから速いのです」、と。総じて言えば、「場を得て、子どもは光る」なのです。

昨年度より本学の「本ヌ（モト）立ツル」人育てとは、をテーマに挙げ、前回は「期待される厳しさを」でした。今回は、その方策の一つについてです。

もう一つ、エピソードを取り上げましょう。

徳島県立池田高校は、昭和49（1974）年の甲子園春の選抜野球で準優勝でしたが、優勝校報徳学園よりも「全員野球」「さわやかイレブン」「ニコニコ野球」などと称され、池田高校蔦文也監督の野球はその年、紙面をにぎわせました。巨人軍長嶋茂雄監督にして、「高校野球の原点」とまで言わしめましたが、その根拠も、「場を得て、子どもは光る」でした。

「勝つ野球の監督である前に、自分は教育者である」と自負した蔦監督の指導方針が、「さわやかイレブン」と「全員交換ポジション制」でした。

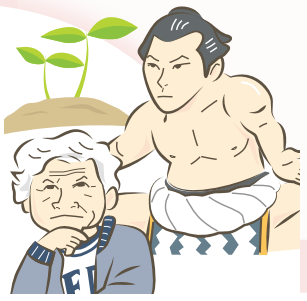
「さわやかイレブン」について言えば、14人のベンチ入り選手枠（当時）に対し、彼は11人で臨みました。それは、一人でも手を抜けば試合が成立しない人数に絞り込み、「自分は掛け替えのない大切な存在なのだ」という意識をつくること、すなわち筆者のいう「尊在感」づくりでした。

後者の「全員交換ポジション制」は、他のポジションも全員に経験させることで、「自分は大切な存在だが、他者もまた大切な存在である」ことを意識づけることでした。

「一人一人を大切にと先生方は言うけれど、それにどう具体的に取り組んでいるのか」。そう言い放った時の蔦監督の教師の顔が忘れられません。

今回も、家庭教育（庭の訓（ラシン））の大切さを詠った「明治天皇御製」を掲載しましょう。

「たらちねの親の心はたれもみな　年ふるまゝに思ひ知るらむ」（親の愛情というものは、誰もが年を取るにつれて次第に思い知るものだよ）



近くて遠い？　遠くて近い？　そんな親の気持ちや子どもの気持ちを一緒に考えませんか？　新富名誉教授による子育てエッセーを隔月でお届けしています。
感想や新富名誉教授への質問、講演依頼などございましたら広報課までお寄せください。

硬式野球部

ドラフト会議 坂口投手がDeNAから6位指名

プロ野球ドラフト会議が10月24日に開催され、国学院大学硬式野球部の坂口翔颯投手（経営4）が横浜DeNAベイスターズから6位で指名を受けた。同部のプロ指名は、令和2（2020）年度から5年連続となる。

たまプラーザキャンパスで坂口投手は同部の鳥山泰孝監督や部員らとともに、ドラフト会議の様子を見守った。坂口投手は6巡目で横浜DeNAベイスターズから指名されると会場は大歓声に包まれた。坂口投手が歓喜の表情を見せると部員らから割れんばかりの拍手で祝福された。

指名後の記者会見で坂口投手は、「先発で起用される、2桁勝利ができるピッチャーを目指していきたい」と力強く語った。鳥山監督は「坂口投手はピッチャーとしてゲームメークする総合力の高さや速球・変化球のコントロールなど長所もたくさんある。球界を代表する投手になる可能性を持っている」とエールを送った。

坂口投手は報徳学園高校（兵庫県）から本学へ進学。1年時には東都大学野球1部秋季リーグの最優秀投手に輝くなど、同部のエースとして活躍した。

なお、同日のプロ野球ドラフト会議では、社会人野球で活躍している院友（卒業生）の江原雅裕投手（令５卒・131期法、日鉄ステンレス）が東北楽天ゴールデンイーグルスに4位指名された。

部員から祝福の胴上げをされる坂口投手

卓球部

国民スポーツ大会 大分県代表として高橋選手3位、院友・小島選手2位

国内最大のスポーツの祭典、国民スポーツ大会(旧：国民体育大会)卓球競技が10月5日から9日にかけて基山町総合体育館（佐賀県）で開催された。本大会は都道府県対抗方式で行われ、卓球競技では「成年 男子、女子」「少年 男子、女子」に分かれ3人で5試合戦う形式の団体戦で順位を競う。国学院大学卓球部からは高橋拓己選手（法1）**＝写真左から4番目＝**のほか在学生2人、院友(卒業生)1人を含む4選手が出場。成年男子の部で高橋選手が大分県代表として出場し、3位に入賞。成年女子の部で院友（卒業生)の小島叶愛選手(令４卒・130期初教)が佐賀県代表として出場し2位入賞を果たした。

高橋選手は全ての対戦で2試合出場。高知県、神奈川県、福島県、石川県、大分県の5県が総当たりで戦う予選リーグで本選への進出が1位のみとなる厳しい条件の中、個人では3勝を挙げる活躍を見せ、準決勝まで駒を進める原動力となった。準決勝では優勝した佐賀県代表と対戦し、善戦するも0-3で敗れ3位で大会を締めくくった。

3位入賞を果たした大分県成年男子チーム

アルティメット部

大学日本一に輝く

（一社）日本フライングディスク協会が主催する第35回全日本大学アルティメット大会が11月2、3日にJ-VILLAGE（福島県楢葉町）で開催され、国学院大学アルティメット部TRIUMPHがオープン部門で初優勝し、大学日本一に輝いた。

本大会は、フライングディスク競技「アルティメット」の大学日本一を決定する大会で、オープン部門には地区予選を通過した24チームが参加。初戦で会津大学に10-5と危なげなく勝利し、続く明治大学戦も9-4で勝利。準決勝は早稲田大学に接戦の末8-6で勝利を収めると、決勝は中部地区1位代表の中京大学との対戦となった。前半に2点を先制するも、すぐに2点取り返されるような一進一退の攻防が続く中、同部は後半に立て続けに3点を取得し、最終的に7-4で勝利し初優勝。見事、大学日本一の栄光に輝いた。

見事、初優勝したアルティメット部のメンバー

渋谷区長への施策提言コンペ

学生が渋谷区の課題解決へ向け熱弁

今年で8回目となる「渋谷区長への施策提言コンペ」が10月30日に開催された。10組の応募があった中、1次選考を通過した７組が審査員に対してプレゼンに臨んだ。審査員は長谷部健・渋谷区長**＝写真前列左から2人目**、根本克彦・サッポロビール株式会社法人統括部統括部長、針本正行学長の3人が務め、それぞれの施策提言に熱心に耳を傾けた。

コンペ参加学生と審査員一同

学生たちは、渋谷区の現状や課題を踏まえつつ、「クラウドファンディング」や「外国人観光客」に焦点を当てた施策などそれぞれの観点から自身のアイデアについて熱弁を振るった。

審査の結果、草沢匠さん（法3）が提案した「外国人観光客用ハチポ『HACHIPO』のリリース！（後略)」が渋谷区長賞に輝いた。長谷部区長は受賞に際し、「まちのコイン『ハチポ』のターゲットを外国人観光客に絞るというアイデアは、とても新鮮で新しい気付きになった」と講評を語った。

他にも、渥美翔さん（法3)、橋詰昌範さん（法3）の2人が提案した「地域連携を活用したふるさと納税寄付増収の仕組み」がサッポロホールディングス賞を受賞。土井恒輝さん(法3)、長尾駿佑さん（法3)の2人が提案した「ホノルル×渋谷×ミラフローレス姉妹都市交流（後略)」が学長賞に選出された。

第142回 若木祭

来場者でにぎわう

国学院大学の学園祭・第142回若木祭が、渋谷キャンパスで開催された。11月2日から4日まで本祭、4日午後3時には後夜祭が行われた。

期間中、120周年記念2号館・3号館前のキャンパスモールには、部会やサークルが模擬店を出店し、各団体が趣向を凝らした品々を提供。校舎内では、文化・学術系団体の展示、軽音サークル、フラメンコサークルのステージや神道系サークルによる雅楽や能の発表会などが行われた。また、3号館前のキャンパスモールや5号館ピロティでは、全学応援団、体育系部会の演武や吹奏楽部の演奏、書道研究会やアカペラサークル、ダンスサークルによるパフォーマンスなどが随時披露された。来場者は足を止め、学生たちの活気あふれる発表に声援・拍手を送っていた。4日には、体育連合会が主催する3組のお笑い芸人によるライブが行われ、会場を盛り上げた。

K:DNA

2024 11

K:DNA ── 創立142年を迎えた国学院大学の遺伝子…個人・個性を尊重する校風　若いエネルギーが未来を変える

陸上競技部

大学三大駅伝2冠の快挙

全日本大学駅伝初優勝

1位でゴールテープを切った上原選手（写真・月刊陸上競技）

秩父宮賜杯第56回全日本大学駅伝対校選手権大会が11月3日、熱田神宮西門前（名古屋市）から伊勢神宮内宮宇治橋前（三重県伊勢市）までをつなぐ全8区間・106.8キロのコースで開催された。オープン参加を含む全27チームが争う中、国学院大学陸上競技部は5時間9分56秒の記録で初優勝、大学駅伝日本一となった。先月の出雲駅伝と合わせて、大学三大駅伝2冠の快挙を成し遂げた。

1区の嘉数純平選手（健体3）がトップと2秒差の2位と好発進し、2区の青木瑠郁選手（健体3）は先頭集団に食らい付き、トップから1分以内でたすきをつなぐ。3区の辻原輝選手（史2）は快走を見せ順位を三つ上げ、4区の高山豪起選手（法3）へたすきリレー。主力区間の4区では、高山選手が粘りの走りを見せトップとの差を1分27秒と優勝を狙える位置で走り抜いた。5区の野中恒亨選手（健体2）は区間賞の走りで2位に躍り出る。6区の山本歩夢選手（健体4）は、区間新記録の素晴らしい走りを見せ第5中継所で41秒あった青山学院大学との差を4秒までに縮め、大会MVPも獲得した。7区で同部のエース平林清澄主将（経営4）は、初めて1位に躍り出てからも厳しいトップ争いは続き、トップと4秒差でアンカーの上原琉翔選手（健体3）にたすきをつなぎ初優勝の望みを託した。気温が上がり22度と11月とは思えない伊勢の陽気の中、8区の上原選手は青山学院大学をかわし、先頭に躍り出る。最後の直線で駒沢大学が猛追する中、宇治橋前のゴールにガッツポーズで飛び込み、5時間9分56秒で初優勝の快挙を達成した。

個人成績

区間	氏名	所属	タイム	区間順位	総合順位
1	嘉数　純平	健体3	28分20秒	2位	2位
2	青木　瑠郁	健体3	31分59秒	7位	6位
3	辻原　輝	史2	33分59秒	3位	3位
4	高山　豪起	法3	33分55秒	4位	3位
5	野中　恒亨	健体2	35分35秒	1位（区間賞）	2位
6	山本　歩夢	健体4	36分47秒	1位（区間新・区間賞）	2位
7	平林　清澄	経営4	50分　7秒	2位	2位
8	上原　琉翔	健体3	59分14秒	9位	1位

総合成績（8位入賞まで）

順位	大学名	総合成績
1	国学院大学	5時間9分56秒
2	駒沢大学	5時間10分24秒
3	青山学院大学	5時間10分41秒
4	創価大学	5時間13分17秒
5	早稲田大学	5時間14分24秒
6	城西大学	5時間14分57秒
7	立教大学	5時間16分21秒
8	帝京大学	5時間16分24秒

大学三大駅伝2冠を達成した出走選手

柔道部

全日本学生柔道体重別団体 3位

講道館杯 中村選手3位、院友・藤阪選手2位

体重別団体で3位となった柔道部男子（同部提供）

講道館杯で3位となった中村選手（同部提供）

体重別団体での学生日本一を争う男子第26回・女子第16回全日本学生柔道体重別団体優勝大会が10月19、20日にベイコム総合体育館（兵庫県尼崎市）で開催され、国学院大学柔道部は男子の部で3位となった。男子の部は54大学が参加。代表選手7人による点取り式のトーナメント戦で実施された。同部男子は1回戦、2回戦で北陸大学、大阪経済大学を相手に順当に勝ち上がり、3回戦の国士舘大学には2対2となるが内容勝ちで勝利。準々決勝で日本体育大学に勝利するも、準決勝で惜しくも明治大学に敗退し3位入賞となった。同部の3位入賞は平成23（2011）年ぶりとなる。なお、優秀選手として73kg級の大塚遥人選手（神文4）が選出された。

11月2、3日には階級別日本一を決める国内タイトルの一つである講道館杯全日本柔道体重別選手権大会が高崎アリーナ（群馬県高崎市）で開催された。同部からは6選手が出場し、男子90kg級で中村俊太選手（健体4）が3位入賞を果たしたほか、同66kg級では院友（卒業生）の藤阪泰恒選手（平31卒・127期健体、パーク24）も2位入賞を果たした。中村選手はシードにより初戦の2回戦を袈裟固めで抑え込み一本勝ちすると、続く3回戦では大外刈りで技ありを取り、優勢勝ちでベスト8に進出。4回戦では国士舘大学の選手に試合開始早々に技ありを取られてしまい、巻き返しを図りにいくも時間いっぱいとなり敗れたが、敗者復活戦を勝ち抜き3位入賞を果たした。

硬式野球部

東都大学野球1部秋季リーグ2位

東都大学野球1部秋季リーグが全日程を終え、国学院大学硬式野球部は2位となった。

最終第5週で同部は、東京農業大学と対戦。10月22日の第1戦は1-0で迎えた二回表に宮坂厚希選手（健体3）のタイムリーツーベースヒットや柳舘憲吾選手（法4）のタイムリーヒットなど打者一巡の猛攻で6-0とする。投げては、當山渚投手（経営3）、南澤佑音投手（健体2）、冨田遼弥投手（経営2）の継投リレーで相手打線をわずか2安打に抑え、9-0で勝利した。翌23日の第2戦では0-1で迎えた一回裏、ノーアウト満塁のチャンスを作ると、仲村光陽選手（健体4）が低めの直球を見極め、押し出しの四球で追いつく。続く、田中大貴選手（健体4）が走者一掃のタイムリーツーベースヒットを放ち4-1と逆転した。その後も追加点をあげ、7-1で勝利した。

この結果、同部は9勝5敗・勝ち点4の2位で秋季リーグを終えた。投手陣の要となった當山投手は防御率1.48で最優秀防御率賞と敢闘賞を受賞。攻守で活躍した伊東光亮選手（経4）は遊撃手のベストナインに選出された。

最優秀防御率賞と敢闘賞を受賞した當山投手